別紙様式３（論文博士申請者用）

（西暦）2024 年度 博士学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

Development of the Japanese version of the stroke stigma scale: a validity and reliability assessment（日本語版 Stroke Stigma Scale の開発：信頼性・妥当性の検証）

学位の種類： 博士（作業療法学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科 人間健康科学専攻 作業療法学域
満期退学時学修番号／研究生番号：18996701
客員教員／研究員受入通知書の文書番号：5 都立大荒管第 522 号
氏 名：北村 新
（指導/紹介教員名：宮本 礼子）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

【背景】脳卒中後遺症者の多くが知覚するスティグマは、外出や他者交流といった社会生活の阻害因子となる。スティグマに関係する社会的課題の把握や介入方法検討のためには定量的にスティグマを測定できる尺度が必要である。本研究では、日本の地域在住脳卒中後遺症者を対象とした日本語版 Stroke Stigma Scale（SSS-J）を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。
【方法】はじめに、原版作成者の許可を得たうえで、逆翻訳法を用いて Stroke Stigma Scale を日本語に翻訳した。日本語に翻訳された各項目の理解のしやすさについて脳卒中後遺症者 8 名へインタビューを行い、その結果に基づいて各項目の表現を修正した。次に、地域在住の脳卒中後遺症者 80 名（平均年齢：69.3 歳）が SSS-J に回答し、そのうち 30 名は再検査信頼性の検討のために 1 週間隔で 2 度回答した。Rasch 分析により適切な評点段階と構造妥当性・信頼性を検討し、対数変換した総得点を用いて基準関連妥当性、構成概念妥当性、再検査信頼性を検討した。分析には Winsteps（5.3.0）と SPSS Statistics version 28 を使用した。研究は研究倫理審査委員会からの承認を得た後に、書面にて対象者の同意を得たうえで実施した。
【結果】Rasch 分析の結果、SSS-J は 3 段階尺度 15 項目が最も良い適合を示した。項目難易度の範囲は-2.01～2.21 logits、対象者能力の範囲は-4.69～0.62 logits（平均-1.41 logits）、対象者分別頼性係数は 0.71（分離指数 1.58）、項目分別信頼性係数は 0.96（分離指数 5.04）であった。基準関連妥当性では、うつ病自己評価尺度である Center for Epidemiologic Studies Depression Scale との間における Spearman の順位相関係数が 0.51（$p < 0.001$）であった。構成概念妥当性では、Stroke Impact Scale の各下位項目との間における Spearman の順位相関係数は、Memory（相関係数 -0.25、$p = 0.032$）、Emotion（-0.32、0.004）、Communication（-0.25、0.033）、ADL/IADL（-0.32、0.005）、Mobility（-0.30、0.008）、Social function（-0.36、0.002）、Recovery（-0.25、0.035）の項目で有意であり、Strength（-0.16、0.163）、Hand function（-0.18、0.126）の項目では有意でなかった。
【結論】Rasch モデルに適合した SSS-J は信頼性と妥当性を有することが示された。本尺度を用いることで、日本の脳卒中後遺症者のスティグマの定量的な測定が可能となる。